最高裁秘書第１６６７号

令和４年６月６日

林弘法律事務所

弁護士　山　中　理　司　様

最高裁判所事務総長　中　村　　慎

司法行政文書開示通知書

３月１日付け（同月４日受付、第０３１００９号）で申出があり、同月７日付けで補正がされました司法行政文書の開示について、下記のとおり開示することとしましたので通知します。

記

１　開示する司法行政文書の名称等

涉外レポート第２１号（片面で５枚）

２　開示しないこととした部分とその理由

１の文書には、個人識別情報（氏名等）が記載されており、これらの情報は、行政機関情報公開法第５条第１号に定める不開示情報に相当することから、これらの情報が記載されている部分を開示しないこととした。

３　開示の実施方法

写しの送付

担当課　秘書課（文書室）電話０３（４２３３）５２４０（直通）

令和４年１月２６日　最高裁秘書課渉外室発行

渉外レポート INTERNATIONAL AFFAIRS REPORT

Vol.21

令和３年度外国司法専門研究会（司法研修所）

令和３年１１月５日，司法研修所において，「令和３年度外国司法専門研究会」が行われ，ドイツ連邦憲法裁判所元長官で，現在はドイツ・フライブルク大学教授であるアンドレアス・フォスクーレ氏がオンラインで講演されました。日本全国から約１７０名の裁判官が参加しました。

研究会は，「憲法の変遷とその限界」をテーマとして行われ，前半では，フォスクーレ教授が，１２年間にわたりドイツ連邦憲法裁判所長官を務めた豊富な経験に基づき，時代とともに変容していく社会と憲法解釈の在り方等について講演を行いました。後半では，フォスクーレ教授と参加者との意見交換が行われ，参加者からは，憲法解釈と世論との関係，社会的な意識の変遷と多様な価値観のある領域における事情の考慮，憲法判断の前提となる立法事実の収集・認定といったトピックについて，フォスクーレ教授に対して質問がされ，活発な意見交換が行われました。

フランス破毀院とデジタル推進室との意見交換会

令和３年１２月９日，フランス破毀院の実務担当者と最高裁デジタル推進室との間で意見交換会が行われました。この意見交換会は，同年６月１１日に開かれた大谷長官とシャンタル・アランス破毀院長とのオンライン司法会合における合意をふまえ，司法分野における日仏交流・関係強化の一環として実施されました。

本意見交換会は，裁判のデジタル化をテーマとして行われ，裁判のデジタル化とその運用上及び技術上の課題や判決のオープンデータ化について，日仏両国の実情が紹介されたほか，活発な意見交換が行われ，盛り上がりを見せました。

本意見交換会の模様については，全国各地の裁判官や裁判所職員の皆様にも視聴していただきましたが，視聴後，外国における裁判実務の実情に刺激を受けたといった声や，もっと日仏間の質疑応答を聞きたかった，今後もこのような意見交換会があればぜひ視聴したいなど，外国司法事情に関心を示す声を多数いただきました。

また，本意見交換会においては，デジタル推進室の協力を得ることで，専門業者による IT サポートなく実施しました。まだまだ運営や進行等に不十分な点があるかとは思いますが，引き続き運営のノウハウを蓄積して，今後とも各裁判官及び裁判所職員の皆様に，広く海外の司法の実情を様々な方法で還元したいと考えております。ぜひ今後開催されるオンラインイベントにも気軽に御参加ください。

ドイツ学術交流会研修生インタビュー

令和３年10月から12月にかけて，ドイツ学術交流会（DAAD）の奨学生・[redacted]さんが最高裁及び東京高地家簡裁において研修を受けました。

研修初日に意気込みなどをお聞きしました。

笑顔でインタビューに答える[redacted]さん

Q：[redacted]さんは，2019年にドイツの司法試験に最終合格し，弁護士資格を取得していますが，日本の裁判所で研修を受けたいと思ったきっかけをお聞かせください。

A：来日前，ミュンヘンの法律事務所で働いていたときに，日本の依頼者に接する機会が多く，その悩みを理解するには日本の法律や制度を理解することが重要だと痛感したことがきっかけです。

Q：研修に何を期待しますか。

A：幅広く日本の司法制度を知りたいと考えています。また，日独の司法制度の共通点や相違点を見出して比較することで，ドイツの司法制度を新たな視点で見ることもできるのではと考えています。ドイツには日本のような戸籍制度はなく，「家」という概念がないので，日本の家族法について特に関心があります。

Q：来日後，日本とドイツとの違いを感じることはありましたか。

A：子どもの頃から日本には何度も来ているので，生活の面ではあまり違いを意識することはありませんでしたが，働く立場になってみると，メールの書き方や挨拶の仕方など，ビジネスマナーの面で違いを感じています。

Q：[redacted]さんは日本語が非常に堪能で，ドイツ語も含め５か国語を身に着けていらっしゃるとのことですが，言語学習のこつはありますか。

A：いえいえ，まだ勉強が必要です。ただ，私の場合は，その言語の映画や，本，動画などを繰り返し見たり，ネイティブスピーカーの方に会ったら話しかけてみたりしました。その言語に触れる機会を積極的に増やし，可能ならネイティブスピーカーの友達を作るのがおすすめです。ちなみに，一番習得が難しかったのは，日本語でした。

◆ ◆ ◆

[redacted]さんは１２月末に研修を終えられ，「非常に充実した研修でした。研修を担当してくださった皆様，ありがとうございました。」とおっしゃっていました。

お知らせ　オンラインイベントが実施されます

JNET ポータルにて募集要項掲載中

令和４年３月１日（火）午後５時３０分～午後７時

外国法曹によるオンライン講演会

テーマ「後見制度における本人の尊重」

講師：デンゼル・ラッシュ氏（英国保護裁判所元上級判事）

JNET ポータルにて予告記事掲載中

（募集要項も追って掲載予定）

令和４年３月１８日（金）午後６時～午後７時１５分

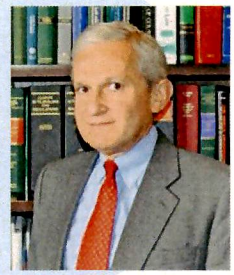
外国法曹によるオンライン講演会

テーマ「デジタル化が進む英国司法の現在地と将来像

～挑戦の軌跡をたどる～」

講師：ジェフェリー・ボス氏

（英国王立裁判所記録長官兼控訴院民事部長）



© Crown Copyright
"New Master of the Rolls,
Sir Geoffrey Vos,
starts his appointment"

秘書課渉外室では，今後もオンラインによる講演会等を企画する予定です。
ぜひご注目ください！

"The Sun himself is weak when he first rises, and gathers strength and courage as the day gets on."

— Charles Dickens

１月６日、東京は大雪が降り、最高裁も雪化粧しました。翌７日には朝から晴れ、まさに、ディケンズの言葉を思わせる一日でした。

このコラムでは，在外研究経験者による体験記をチラッと紹介します。

チラッと海外・・・

楽器の名前は…

東京地方裁判所裁判所書記官　柿本真紀
令和３年度　行政官長期在外研究員
リーズ大学派遣

１０月のある朝，日課のランニングから帰ってくると，聞きなれない音色が聞こえてきた。音をたどっていくと，街角で，タータンチェックのキルトを着た男性が，３本のパイプが突き出た楽器を吹いていた。頬を大きく膨らませて息を吹き込むと，力強い音が響いてくる。

楽器の名前も分からないまましばらく見とれていたのだが，[redacted]に写真を送ったところ，たちどころに謎が解けた。スコットランドのバグパイプでしょ，昔教科書で見たよ，という。日本のカンパンの缶にも描いてあると教えられて検索してみると，おなじみの缶には，まさしく先ほど見た楽器を吹く人物が描かれていた。

この男性はあちこちの街を回っているのか，時々しか姿を見せないのだが，彼が来ている時は，バグパイプの音色が部屋にいても聞こえてくる。

調べてみると，昔のスコットランドの戦いでは，奏者が陣頭でバグパイプを吹き，その奏者が倒れた時はすぐに別の兵士が代わって，途切れることなく演奏を続け，味方を鼓舞していたらしい。バグパイプの音がよく通るのももっともだ。

楽しませてもらっているお礼を込めて，男性の足元の缶に硬貨を入れたら，いつも難しい表情の彼が，演奏しながら微笑みかけてくれた。次はいつ来てくれるのか、毎朝ひそかに楽しみである。

次号の渉外レポートもお楽しみに！